オレンジ色の戦人

矢伝観維

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレンジ色の戦人

【Ｎコード】
Ｎ８９１０Ｓ

【作者名】
矢伝観維

【あらすじ】
元号が変わり快成（カイセイ）となった頃、米金融大手の破綻に伴いかつてない不景気が日本を襲う。不況による混沌とした国内を治めようとある法案が可決された。それが『軍需産業推進法』である。だが負の遺産は大きく蔓延る凶悪犯罪、企業間の武力闘争は歯止めが利かなくなっていた。これを治めようとも安易に殺人を犯せない警察や自衛隊に代わって巨悪組織等を鎮圧するために組織されたのが『公闘官』と呼ばれる人々だ。彼等は超法規的に悪を罰する。これは『公闘官』の高校生・紅藤（クドウ）　夕（ユウ）の物語である。

◇序章～第1話～

あれ、おかしいな。さっきまでちゃんと立っていたはずなのにどうして俺は天井を見上げているのだろう。

「天地がひっくり返ったか」

そんなわけがないことはもちろん知っている。ここはベッドの上、さっきまで夢を見ていた。

「ひっくり返っているのは貴様自身だユウ。　早く起きろ、遅刻しても私はしらんぞ」

ユウというのは俺の名前、紅藤（クドウ）　夕（ユウ）を指しているのだろう。
ブレザーに着替えながら俺に指示を出すこの男は宮永（ミヤナガ）　誠哉（セイヤ）でクラスメイトでありルームメイトでもある。
オールバックの髪に狼のような鋭い眼光、頬に走る一筋の刀傷、パッと見は極道者のようだ。

「オーライ、誠哉。　俺が時間に合わせるんじゃない、時間が俺に合わせるんだ」

「せいぜい時間と戦うがいい。　私は先に出る」

血も涙も無いのはご愛嬌だ、慣れてる。
誠哉は特注のマグナムをホルスターに納めると足早に部屋を出ていった。
あいつはいつも早めに部屋を出る、だから大して急ぐ必要もないのだがこのままだと布団と同化してしまうかもしれないので起きる

ことにしよう。
耳をすませば俺が住んでる寮のすぐ近くにある射撃練習場から銃声が響いている。朝から射撃訓練なんて精がでるぜ。
俺が今から登校するのは国立公闘官高校だ。
公闘官とは、政府が不景気を打開することを目論み一般企業に国内での軍需物品の生産と販売を許可したのを発端に、景気は上昇したのだが重火器を用いた凶悪犯罪が多発する事態をもたらし、企業間での武力闘争が激化、それを鎮圧ならびに排除する役割を担う職業だ。
普通の高校に通うのも魅力的だったが、推薦されてここに通うことになった。
入学試験は死ぬほど苦しかった、俺を闘校に推薦した奴にはいつか三途の川で急流下りをさせてやろうと思う。

「ふぅ……」

在学中に殉職する仲間も多い中で俺が生き長らえているのは共闘者のお陰だな。
闘校のイーストウッドの異名を持つ誠哉に感謝感謝だ。
寝巻きのTシャツ短パンを脱ぎ捨て、防刃仕様の学ランを着る。
銃は銃で便利なのだが俺はあまり好きではない。リロードやジャムなどやや面倒な事態も起こりうるしメンテナンスもめんどくさい。
俺は壁に立て掛けておいた日本刀を手に取ると腰に帯びる。
やはり武器はヒカリモノに限る。
高校生なれど入学した段階で三等公闘官の階級が与えられる為に銃火器や刀剣の対人使用が認められている。
進級と同時に昇級するので現在俺は二等公闘官だ。

「ユウ！　起きてる？　入るよー」

ドアを開けて俺の部屋に女子が入ってきた。

「あん？　ユウはお眠なんだよ、騒がしくするな。　触らぬ神に祟り無し、だ」

わざわざ女子寮から男子寮まで急用でもないのに訪ねて来たこの娘っ子は小石川（コイシガワ）　癒歌（ユカ）、公闘官高校衛生隊に所属している俺の幼馴染だ。

幼馴染といっても実家同士が近く小学校中学校現在と学校が偶然にも同じというだけ。

血に外国人が混じっているらしく髪は日本人らしからぬ銀色の長髪で、俺と同じ強襲隊に在籍する女子はみんなボーイッシュな短髪ばかりなのでとても新鮮だ。

容姿端麗なのとあわせて治癒の女神と呼ばれているユカは医師免許も持っているエリートだ。

小学校の時に髪の色で虐められているところを救ったのをきっかけに妙に懐かれてしまった。

「わたしがユウを迎えにくるの今月何回目かな？」

「さてな。　数えてないからわからん」

「3回目だよ？　いくらユウが神だったとしても3回も迎えに来させられたらわたしだって怒るんだから」

「怒るとどうなるんだ？」

「毎日夜と朝にメールをいっぱい送ります」

薬だって朝と夜に飲めば効くかもしれないが、過剰摂取は死の危

険さえあり得る。

「それは勘弁してくれ。　怯えて夜も眠れん」

「もうっ！」

ユカは河豚みたいに両頬を膨らましている。

それで怒っているつもりだろうが逆に可愛らしい件について。

「それっ」

人差し指をユカの頬に埋めてみた。

「ぷすん……」

「あ、割れた」

「ふふっ、早く行こう！」

「オーライ」

指先に残る柔らかな感触を確かめつつ部屋を出た。

一緒に歩くユカから香るのは消毒液のような薬品の匂い。それと仄かに香る柑橘系の芳香。

白を基調としたワンピース型の制服は清潔感が溢れ衛生隊に相応しい。

寮の中央ロビーには登校するべく集まった生徒でいっぱいだ。

「よう、紅藤。　朝っぱらから女神とにゃんにゃんか？」

この空気を読むのが苦手そうな男は同じ強襲隊に籍を置く東城（トウジョウ）英孝（ヒデタカ）、俺と同じく剣を用いるが日本刀ではなく西洋刀（サーベル）の使い手だ。
茶髪で襟足をゴムで纏めている軽い男だ。
ちなみにあだ名はエイコー。

「エイコーか。　そんなんじゃねえよ」

「股の刀も奮ってるのか？　早く鞘に納めろよ」

「〜〜！」

あらら、下衆なトークにユカは真っ赤に沸騰してしまった。

「納める前にお前で試し斬りがしたい。　ちょっと首を洗ってきてくれ」

「はっはっは、悪かったよ。　俺の御首にはまだ価値がないからな。時が来たら狙えばいいんじゃね？　ユカちゃんもメンゴメンゴ！」

公闘官を目指す奴にはろくな奴がいないのか、それとも高校生なんてこんなものなのか、とりあえず肩を組むなよ暑苦しい。
こんな下らない朝の集いを悠長にしてても時間はたっぷりある。
メイン玄関の前には校舎行きのバスが停車するからだ。
東京都と千葉県の県境に設置された東京都第２４区は国の管理下にあり特別養成区となっていて一般人は住んでおらず公務員しか居住していない。
広大な敷地内には校舎や寮や各自施設が配備されている。
俺たちは校舎行きのバスが来るのを待った。

◇序章～第2話～

バスが来るまで残り数分か。
さて、今日のカリキュラムもいつも通りの過酷なものだろうな。
気合い入れとくか。

「紅藤よぉ、たまには俺と一緒に一狩りいこうぜ。　宮永とばっかり組んで勲功だの小金だの稼ぎやがって。　俺の中でお前達は互いのマグナムと刀で毎晩激しいコトしてんじゃねえかなって」

「はっ、昼間から激しい授業に耐えてるのに毎日夜の授業なんて身体が持たないんだよボケナス。　ま、たまにはエイコーと仕事も悪くはないがな」

「そうこなくっちゃな」

エイコーは闘校生徒に与えられる専用端末を鞄から引っ張り出す。
午後からのカリキュラムは自分で組む、端末にアップされる任務に個人やパーティーを組んでエントリーする。
仕事内容は難易度が低い物だと一般人のボディーガードや警邏などから選択可能だ。
実戦的授業といえども日当や報酬はしっかり払われるし、その金を学費に充てることも可能だ。
闘校は私立高校ですら遥かに凌駕した高額な学費を納めなくてはならない、裕福ではない家庭の者は在学中に積極的に稼いで親を助けなければやっていけない。
天才的な能力を持った者なら全額免除や一部負担などもある。
俺は推薦入学だが学費は一部負担だ、のうのうと学園へブンを満喫するわけにはいかない。

「これなんてイージーでハッピーだ」

「どれどれ？」

画面に表示された仕事内容は、東京を拠点にしている任侠組織・幸瑛會（コウエイカイ）の下部組織の中の下部組織の中のもう何次団体であるのか不明な組織の使い走りとされているギャング・ピクシーの排除とそのリーダー・坂東の生死を問わない捕縛だった。

「人数はざっと１０人弱、武装していても飛び道具の類は使わないだろう。　下部の中の下部な貧乏ヤクザが使い走りごときにチャカを流すとは思えん。　持っていたとしても粗悪なおもちゃだ、問題ない」

「お手頃ってやつだな。　報酬とリーダーの懸賞金は？」

「諭吉１０人を山分けだ、すすめが５人ってこった。　リーダーの首に金はかかってない、ま、サービス残業だ。　エントリーするぞ紅藤」

「オーライ、任せた。　今日は見たいテレビがあるからな、残業はしない方向でいくから、相棒！」

エイコーがエントリーボタンを押したところにちょうどいいタイミングでバスが来た。

切符なんて取る必要はない、バス料金も学費に含まれている。

だが降車する停留所前ではしっかりボタンを押さなければな、当然のことだ。

まだ春なのに車内は蒸し暑い、人口密度が高いせいだな。減らし

てやろうかなと思っても仕事に関係しない殺人はしっかり殺人罪が適用される。
まだワッパなんかで手首を飾りたくはない。
「ユウとエイコーさんは午後から仕事なの？」
ユカが涼しげな顔で聞いてくる。
こんなむさ苦しいバスの中でも女神様は汗一つ流していない。流石に女神様という敬称で呼ばれてるだけあるぜ、汗臭い女神なんてもはや女神じゃないもんな。
「腹ごなしってとこだな。　目標の敵チームをシェイクすればついでに腹もいい感じになるってとこだ」
「ユウ、油断は禁物です。　注意一秒怪我一生、衛生隊としては」
「注意一生怪我一秒だ」
「紅藤、それ逆」
「まあな。　しかし現実はそうなんだよ。　注意してても防げない物はある。　怪我なんて思えるのは一秒だけ、その後待ってるのは死だぜ」
「ニュアンスは伝わったぜ」
「それでもっ、油断や傲りは死を招きます。　注意してくださいね」
ユカは停車ボタンを押した。
次は公闘官大学附属病院前か、今日の衛生隊はここで学ぶのか。

ユカと同じ清純な白い制服を着た人々が降りていった。

「やれやれだな」

「あぁ、やれやれだ」

衛生隊には女子が多い、男女の集団から女子を引けば残るのは男子だ。

車内は屈強な野郎で溢れていた。

俺とエイコーは目を閉じて口で息をしながら学舎へ到着するのを待った。

「間もなく、公闘官高校正門前です」

機械のような女性の声でアナウンスが流れた。

車内にいた野郎と一緒にバスを降りた。

東京都第２４区特別養成区も広いが高校の敷地も無駄に広い。

俺とエイコーは攻撃部強襲隊クラスだ。

教室は一緒だが自分の得物によって授業がかわる。

俺とエイコーは正門を抜けて敷地のほぼ中央に位置する第二学年校舎に入る。

ここから教室までがまた長い。

攻撃部の他にも防衛部・情報部などと分類されたクラスの教室が乱立している。

階段をのぼって長い長い廊下を突き抜け教室まで辿り着いた。

「エイコー、１限目って」

「確か法学じゃなかったか？」

「法律関係は苦手だぜ」

だがこればっかりは気を抜くわけにはいかない。

法に則らない殺人を犯した者は問答無用でブタ箱に蹴り込まれて臭い飯を食わざるをえなくなるからな。

公闘官といえども法を遵守してこそ悪を裁けるのだ。

席に着きクソ重かった法律書やルーズリーフを机上にぶちまけた。

こんな分厚い法律書を諳じられるようになれと先生は悪魔的なことを言いやがる、5センチ以上あるぞこれ。

「間もなく予鈴が鳴るだろう、速やかに着席せよ！」

オールシーズンを真っ黒なスーツ姿で過ごす法学の教師がやってきた。威圧感が半端ない。

クラス担任でもあるこの男は大岡（オオオカ）　忠政（タダマサ）、オが3つ連なっているので影ではオーサンと呼ばれている。

経歴は詳しく知らないが、公闘官に関する法律のスペシャリストで元検事だとか。

「いつもお前達に言っているが、現在日本は世界で最も危険な国と言っても過言ではない。　私はこの手で直接罪人を捕縛し、時には検事として間接的に幾多の罪人を断頭台に送った。　だが、未だに国内は混沌としており犯罪者の数は減らん。　企業や団体までも大小様々な武装組織を配備している」

オーサンが語り出すと本当に止まらない、おばちゃんのマシンガントークが小鳥のさえずりにさえ聞こえる。

オーサンの発する一音一音が頭に腹にビシバシと響く。

「ポイ捨て1つでも我々に見つかれば問答無用で斬られても文句は

言えぬ程に法は歪んでいる。　風紀の乱れはやがて社会の乱れに繋がるからな、これも法だ。　紅藤、知識無き者に公闘官は務まらない」

欠伸したのがバレたか。

しまったな、真面目に聞いてるふりをしておけばよかった。周りの奴らもみんなそうしてる、溶けておくべきだった。

「ポイ捨てをする公闘官は犯罪者です。　法は我々を統制する為にあります」

「うむ、これからお前達に必要不可欠な法を叩き込む。　しっかりついてこい」

なんとか切り抜けたようだ。

スッキリ講話に入れたのでオーサンもご満悦みたいだ、薄気味悪いったらない。

『強制武力介入法』が俺たちに必要な法だ。

内容はきめ細かいが要約すれば簡単だ。軽犯罪者だろうが凶悪犯罪者だろうが殺してよし、以上だ。

オーサンは黒板にびっしりと文字の山を築いていてもはやホワイトボードみたいだ。

俺のルーズリーフは綺麗な物だ、まるでホワイトボードみたいだ。

法学・語学・戦闘訓練と過酷な午前の部も気付けば終了していた。

結局うとうとしてしまっていた俺、なんのために気合いを入れたかわからんが、まあいいか。

これからギャングを狩りに行く、軽い仕事だ。

「紅藤、昼メシはどうするよ」

エイコーが腹をさすりながら聞いてきた。

「区外で食おうか。　そのまま仕事に行けるし」

「ナイスアイデアな」

俺とエイコーは教室を後にして腰に帯びた刀の音をカシャカシャと鳴らしながら正門へと向かった。

◇序章～第3話～

バスで校外にある駅へ行き、在来線に乗車して都心部へと赴こう。
その前に装備やら持ち物やらを確認しておくか。
装備はもちろん腰にある日本刀、無銘だがなかなかの代物だ、貯金を注ぎ込んだだけはある。
有銘な日本刀なんて高校生ごときが買えるほどチープではない、欲しいけど先立つ物が無いのでどうしようもない。
持ち物なんて特にはないか、財布やら携帯やらしか鞄には入っていない。法律書は教室に置いてきた。筋トレに行くわけじゃないんだ、邪魔以外のなにものでもない。
後は敵を知らなくてはな。

「エイコー、ピクシーとやらはどんな奴等なんだ？」

「元締めのヤクザに従うただのヤンキーの集まりだ。　日が暮れてくると街に繰り出して悪さをするらしい。　日中は代々木公園辺りにたむろしてるんだとさ」

「代々木公園て……、そいつら発声練習でもしてんのか？」

「あそこは人が多いからな。　集団で外郎売口上の練習でもやってるように見えるかもな」

ギャングが外郎を売るとは到底思えん、別の中国経由の薬を叩き売ってるなら想像できるがな。

「木を隠すなら森ってことか」

「だな。　あと奴等の罪状は暴行・脅迫・器物破損もろもろ、頑張るねー。　未成年なのをいいことにやりたい放題。　とりあえず群れなきゃなにもできないクズ共だ」

「ふーん、俺たちと同じ１６歳ってのも何人かいるみたいだな」

端末に表示された顔写真の横に詳細なデータも載っている。年齢・体格・経歴・家族構成・所属などだ。

これは情報部の奴等が日々の探索の成果をアップしたものだ。さすが情報部、なかなかいい仕事をする。

「そんなの関係ねえ」

エイコーから溢れる闘気と殺気、早くもヤル気満々だ。

「はやんなよ、エイコー、早漏は嫌われるぞ。　順序は大切だ。行く所に行ってからにしろよ」

「おう」

俺たちはバスに乗って校外に出た。

バスに揺られること数分、特別区中央駅に到着した。

特別区中央駅は特別区にある唯一の駅である。

駅周辺は都心から移転した公官庁や政府の中枢機関も集中しており第二の霞ヶ関と呼ばれている、らしい。

路線は民間が所有し運営しているがこの駅は国交省が独自に管理している国営の施設だ。

警備は厳重で改札も二重な上に公務員専用パスがないと入ることも出ることもできない。

駅構内には政府や都の職員らしきエリート臭がぷんぷんする人間

で溢れている。一般人なんてごく僅かしか見当たらない、許可証があれば一般人でも入ることも可能だが、よくやるよと思う。
警察官に監視されながら改札の磁気読取部分にＩＣチップ内蔵の闘校生徒手帳をかざす。
そんなに俺を凝視するなよ、尻の穴がむず痒くなるだろうが。業務を忠実に遂行してるのは理解するが、一応俺たちも公務員だ、これから仕事に行くだけなのにそんなに警戒するなよ。

「紅藤、お前めっちゃ目をつけられてるな」

「人のこと言えないだろ」

確かに俺の見た目は長髪ではないが髪もそこそこ長いしワックスでセットしていて品行方正には見えない。しかし、ホスト崩れ風のナルシスト風のエイコーに言われるのは心外だ。

「胸クソ悪いぜ、行くぞエイコー」

「はっはっは、警官に見られてたくらいで機嫌損ねるなよ、紅藤」

俺の肩に平手打ちをかますエイコー。

「お前の言葉が腹立つんだよ。　鼻でしか飯を食えないようにしてやろうか」

「怒るなよ紅藤。　短気は損気だぜ。　はっはっは」

エイコーに肩を拘束されたままホームに向かい東京駅経由新宿駅行きの快速に乗った。
昼下がりに上り電車を利用する者はあまりおらず、悠々と座席に

腰を下ろせた。
「あ～もしもしぃ～？　あたしだけどぉ～さっき電車に乗ったとこぉ～。　今どこにいんの～？」
入口付近からギャルっぽい女が汚い声で電話をしていた。
周りの乗客もその声に相当イライラしている、気持ちはよくわかるぜ。
しょうがねえな。
「おい、バカ女。　頭悪そうなでっけー声で喋るな、迷惑だ」
座席からそいつを睨み注意した。
「もしもし～？　なんかうぜー奴に絡まれたんですけど～」
「喋んなって言ったぞ？」
汚れた血を吸うのに慣れた愛刀にそっと触れる。
「なんなの？」
「ま、まずいよ……、公闘官だよ、アイツ」
連れらしい女がバカ女の口を手で覆った。
賢明な判断だ。
「公闘官？　ソレなにぃ～」
「ちょっと黙って！　すいませんでした！」

連れの女はバカ女の盛られた髪を掴むと強引に頭を下げさせた。
「もういいから、電車の中は静かにな」
２人はおずおずと隣の車両に移っていった。
「ぬるくね？」
西洋刀を撫でていたエイコーが言う。
エイコーの得物は血が吸いたくてたまらないようだ。
さっき自分で短気は損気って仰ってたじゃねえか。
「気持ちはわかるがな、普通の電車をブラッディエクスプレスなんかにしたら嫌な気分になるだろ？　血の臭いは慣れてないとキツイからな。　異臭がするのは金曜日の終電くらいにしとこうぜ」
「ま、いいや」
エイコーは頭の後ろで手を組むと車内広告を閲覧する。
乗客もバカ女の声が聞こえなくなってホッとしているようだった。
新宿駅で乗り換え原宿で下車し飯屋を求めてぶらつく。
通行人は俺たちの姿を見るとどこか挙動が不自然になる気がする。
悪いことをしていなくてもそうなるのは仕方ないか、闘校の制服にはそういう効果がある。
「紅藤、メシはファミレスでいいか？」
「いや、代々木公園に行くならコンビニで適当に買ってそこで食おう」

「いーねぇ！　ピクニック！」

餓鬼のようにはしゃぐエイコーだった。

竹下通りは若者で溢れていた。買い物袋を引っ提げてみんな笑顔を溢している。

たまには服でも見にこようか、夏服が欲しい。

「紅藤、今度服でも見に来ようぜ」

「ああ、いいぜ」

休みの日が待ち遠しいな、ちょうど金も入るし。

楽しい休暇を思い浮かべながらコンビニに入った。

◇序章～第４話～

コンビニに入って適当におにぎりやサンドイッチを見繕う。
店内の客は品定めに悩む様子も見せず買いたいものを俺たちに見せつけるようにしてレジに持っていく。いや、わざわざ見せつけてるんだな、万引きと思われたら堪らないもんな。でも大袈裟なんだよ。
コンビニからでると黄緑色のウィンドブレーカーを着たおっちゃんが旗を持って立っていた。
旗には路上喫煙をやめましょうと書かれている。
条例で罰則を受ける対象である路上歩行喫煙。警察官やボランティアの人々が啓発しても所詮は徒労だな。

「昼間っから堂々と歩きタバコする奴もまだまだいるんですねえ」

おっちゃんに尋ねてみる。

「あなたは……」

「ああ。　二等公闘官・紅藤夕と申します」

「ええ、ええ、その制服でわかりますよ。　綺麗で健全な渋谷区を自治体は目指しているのですが……、やはりなかなか実になりません。　罰金といった罰もあるのですが、マナーやエチケットはなかなか守って頂けないようで」

罰金なんて甘っちょろい。
俺たち公闘官にとっては条例違反やマナー違反は立派な犯罪、決められた事を守れない時点でそいつは犯罪者だ。野放しにしておけ

ば日本が乱れる。問答無用で手を使わないでタバコを吸う方法を教えてやる。
それが超法規的法律『強制武力介入法』なのだからな。
「あまりにも酷いようなら公闘官を派遣してください。　綺麗さっぱり粛正します。　綺麗で健全な渋谷を共に目指しましょう」
おっちゃんの努力に敬意を表し深く一礼すると代々木公園へと向かう。
春の代々木公園は実に素晴らしく咲き誇る桜はとても美しい。
そんな絶景の下で便所座りをする3人の若者が目に入った。
喫煙所でもないその場所でぷかぷかとタバコをふかしながら下劣な声で叫んでいる。
スウェット姿のオールバック・黒金ジャージの金髪・だぼだぼのトレーナーにズボン、なるほど典型的だな。
「紅藤、あのガキ共は」
「ああ」
端末を取り出し画面を開きギャング・ピクシーのメンバーの顔写真一覧を表示し参照する。
「ピクシーの連中だな」
「そうか」
エイコーは腕をぐるぐる回し肩をほぐしながらピクシーのメンバーへと歩みよった。

「なあ、変な所でタバコ吸うな。　火事になったらどうするよ？」
「あぁ？　火事になんてなるわけねぇーだろ、バカが！　なんか用ですかー？」
真ん中にいたスウェットが煙をエイコーに吐きかけた。
「そうか。　ところでお前ら何歳だ？」
「２０歳でーす、文句ありますかー？　ぎゃっはっはぁぁ！！」
その態度は年齢を隠す気は無いと、データには１７歳とある。
「……」
エイコーは無言で座る３人を見下している。
「だからなんだって聞いてんだよ！　殺すぞ！？」
スウェットは立ち上がる、猫背のわりには背が高いな。
そしてエイコーの胸ぐらを掴む。
観察能力ゼロだな、腰に西洋刀を帯びた奴が来たら普通は警戒するだろう、なめ過ぎだな。
「おぉ、殺ってやれ、これ使えよ」
黒金ジャージは馬鹿デカい軍用ナイフをスウェットに渡す為に取り出した。
「あのナイフ知ってっか？　あの有名な帝日鉄工が作った優れ物、

めっちゃ切れ味サイコーだぜ。　だから死ねよ」

帝日製か、良い物持ってるな。

「刃物なんてな、切れればいいんだよ。　解体ショーの始まりだ」

「あぁ？　こいつマジうざってぇな。　おい、早くそれよこせよ……」

「……」

黒金ジャージとだぼだぼ服は青ざめて絶句している。

「良かったな、仲間から冥土の土産をいただけて。　そいつで俺じゃなくて閻魔にでも喧嘩を売るといいさ」

「え……？」

スウェットは胴体から真っ二つに切断されていた。あの近距離から抜刀の力と速度だけで大男の身体を両断するのは簡単じゃない、あっ晴れである。

エイコーの胸ぐらを掴む手から力が消えていくとスウェットの顔面をぶん殴り上半身を吹き飛ばした。

どこ製とか関係ないんだよ、エイコーの言う通りだ。身をもって体験できて良かったな。ぜひとも次の機会に活かしてもらいたい。

「さてと。　お前らは未成年者喫煙・渋谷区条例違反・殺人教唆諸々か。　只今地獄への往路切符をプレゼント中だ、喜べ」

「ひっ……」

遺された2人は逃走しようとするがそうはいかない。罪から逃げるなんて不可能なんだよ。
俺は抜刀すると2人の前に立ちはだかった、そんなルーズな服装してたら素早く動けないのは当たり前だ。

「強制武力介入法に基づきお前らを処分する。　一言スイませんと言えば見逃してやろうと思ったがな。　いろいろ吐き過ぎだ」

両手の指を全部落として掌だけにするくらいで済んだのにもったいないことをしたなこいつら。
指がなければタバコを吸うのも容易ではないだろう、どうしてもって言うなら転生後の未来に何でも吸い付ける手に改造してもらえばいい。

「くっ……、へへっ！！」

おいおい抗う気かよ、だぼだぼ服からヒカリモノ出しやがった。
自分よりも遥かに強い者かどうかも見抜けず抵抗するなんてカマキリと一緒だな、やれやれだ。

「オーケイ、そのナイフどう使うんだ？　武士道精神でも見せてくれんの？」

「うううう、うるせぇよ……！！　死ねぇぇぇ！！」

感情的になり思考を失った奴の攻撃ほど分かりやすいものはない。
だぼだぼ服が俺に向けてバカ正直に猪突猛進してくる。

「介錯の出番はなしか」

単純な攻撃を簡単なステップを踏んで避けるとだぼだぼ服の首をすっぱり斬り落とした、もうフードは必要ないなこのトレーナー。

「ひっ……、ひっ……、たす、け、て……！」

黒金ジャージはこんなに暖かな陽気なのに腰を抜かし尻を付いてガタガタと震えている。

「ちと聞きたいんだけど、お前らのリーダーは今どこにいんのよ？」

エイコーは刃に付着した血糊を紙で拭いながら黒金ジャージに聞く。

「はぁ……、し、しら、しらねよっ、はぁ、わから、ねえよっ」

「せっかく拭いたのにー」

「がぁっ！！」

エイコーは西洋刀を逆手に持つと黒金ジャージの腹部に刃先を突き刺し捻る。

「エイコー、抜く時気をつけろよ。　優勝してねえのにレッドアイを浴びるなんてごめんだからな」

「了解了解」

エイコーは返り血が出ないように注意して刀を抜くと空を斬って風圧で血を払った。

「坂東の居場所はしらみ潰しに探すか。　潰すのは明太子だがな」

コンビニ袋からおにぎりを取り出して頬張る、美味いな、運動したからお腹が空いた。

「あとピクシーもな」

「エイコー冴えてるな」

「まあな」

俺達は軽めの昼食を摂りながら公園内を捜索することにした。

◇序章～第5話～

歩道を少し歩くと後処理をするのを忘れていたのを思い出した。

「そういえば処理部に連絡してないな。　エイコー、ブルーシートとか持ってきた？」

死体を道端に放置しっ放しはマズイだろうし、公園を訪れた人々に不快な思いをさせたくない。

大規模な戦闘になったり大量の死体が産まれる可能性がある場合なら戒厳令を敷いて一般人の侵入を禁止したりも可能だが、今日はそこまでしなくても大丈夫か。

「ああ、鞄に入ってるよ」

道を引き返して死体にブルーシートを被せ、端末を使って公闘官処理部に連絡を送信して暫し待つ。

「お疲れさまでーす。　後は我々にお任せを」

防護服を着た処理部の人々がやって来た。処理部の仕事は死体の回収と現場の修繕や清掃の手配等だ。嫌な仕事だが死の危険は限りなくゼロだし給料も高い、精神力が屈強な者なら天職と言えるだろう。

「まだ増える可能性大なのでよろしくお願いします」

「承知いたしました。　御武運を」

テキパキと作業を開始したので邪魔にならないように去る。
後は処理部に任せてピクシーのリーダー・坂東の捜索を始めようか。
捜査の基本は聞き込みだ、そこで遊んでいる家族連れに聞いてみるか。

「すいません、二等公闘官の紅藤と申します」

「はい？」

小さな娘と遊んでいた、むしろ小さな娘に遊ばれていた父親に尋ねてみる。

「今仕事中なんですが、ヤンキーの集団みたいなものを目撃しませんでしたか？」

「何かあったんですか？」

「いや、そんなに警戒しないで下さい」

「そうですか、このベレッタを使わなくて済むならいいのですが」

父親はジャケットからベレッタを取り出して言った。銃を持つのは結構だが、いざというときに使えなければ意味がないぞ、おっさん。銃は撃つ物であって眺める物じゃないんだからな。

「安心して家族サービスしてください。　ところで集団は？」

「ああっ、すいません！　噴水の近くで悪そうな若者が集まってるのを見ましたよ」

「ご協力感謝します。　おい、エイコー！」
木にもたれて恍惚の表情を浮かべていたエイコーはこっちを見る。
「話しは終わったのか、紅藤」
「ああ。　今から話をしに行くところだ、噴水にな」
「そうか。　それならたっぷり語ってあげないとな、コイツで」
エイコーは西洋刀を抜くと切っ先を俺に向けて言う。
「だからはやんなって、モノを出すのは本番まで待ってろ」
待ても出来ないなんて動物以下だなコイツ。
家族連れに会釈をして公園の噴水に向かう。
噴水の回りには先ほど旅に出た奴らと似たり寄ったりな服装や髪型をした奴らがたむろしていた。
木に隠れて目視で現状を確認、人数は８人か、ピクシーの全メンバーと捉えていいだろう。
「どうするよ？」
ピクシーに関わるのが嫌なのか幸い一般人の姿は見えない。
「作戦なんていらない。　たかだか頭の悪いリーダーに従う頭の悪い集団だ、行くぞ！」
「あいよ」

刀を抜き奴らへと歩み寄る。
抜き身の刀を持った俺たちが近づいているのにヘラヘラと見てくるだけか、人数に物を言わせて優勢と思っているのか。
「刀なんか持っちゃってどうしたんでちゅかぁー？」
グラサンを掛けた一人が近づいてくる。
「眩しいのか？　似合ってねえよソレ」
エイコーは余裕の表情でグラサンごとそいつの頭を斬り割いた。
噴水が綺麗だ。
「無許可で武装した者が徒党を組むことは禁じられている、尚、過去に犯した罪も血を以て償ってもらう。　ギャング・ピクシー、武力介入法に基づき浄化する」
一応決まりだからな、胸ポケットから生徒手帳を出すと奴らにつきつけた。
「ごちゃごちゃうっせーんだよ！！　やっちまえ！！」
始めから武器を持って身構えておけばいいものを、油断と傲りは身を滅ぼす、って朝誰か言ってた。
「死ねや！！」
バタフライナイフ、金属バット、特殊警棒、メリケンサック。
近接戦闘メインか、面白い。

「これ以上酸素を使うな、地球に迷惑だ」

敵の攻撃を避けては斬り付ける。無駄な動きに加えて無駄口を叩きながらの戦闘、もはや生きていることが無駄だなコイツ。

「ぐぅぇわぅっぁぁ！！」

「次」

汚れた刀身を足元に倒れている奴の服で拭い、再び構える。

「なんっなんだよっお前！！」

「人の話しはちゃんと聞くもんだぜ？　はぁっ！」

「がぁっ！！」

そいつの右肩から袈裟を描くように斬ってから蹴り飛ばす。

「動くんじゃねぇ！」

「あん？」

リボルバー式小口径銃か、人を殺さない警察官でももっと良い物を装備している時代だぞ、とんだヴィンテージだ。

「撃てよ」

「死ね！」

あの角度ならこの位置から真っ直ぐ斬り込んでも当たらないか。
直後に銃声が響く、ほらな、当たらない。
「はぁ！」
「ぐぇわぁっ、手がぁ、俺の手ぇ！」
銃を持っていた手首を斬り落とす。
「殺すんだろ？　早く撃てよ」
「ひぃっ……、助け、神さまぁ……、助け、て」
「神はフレックスタイムだ、まだ出勤してねえよ」
「ぐわっ！！」
十字に切り刻んで止めをさした。
よし、あらかた片付いたか。
「エイコー？」
「おう、後は坂東だけだ」
「オーケイ」
一番奥にいたリーダー・坂東を俺とエイコーで挟んだ。

◇序章～最終話～

敗軍の将などいつでも惨めなものだ。最後まで抗うのも潔く軍門に下るのも個人の自由だが、無駄なことをする奴は嫌いだ。

「で？　お前はどうすんの？」

金属バットを振り回し喚き散らしている坂東、見苦しいったらない。

坂東が動く度に耳や唇につけられた数多のピアスがぶつかり合って音を立てる。

「このっ、このっ、ひひひ人殺しぃぃ！！」

周囲に転がる自分の部下だったモノを怯え切った目で見ながらひたすら喚く。

合法的に殺人が許された存在に対して人殺しとは罵りでもジョークでもなんでもない、読経する僧侶に煩い黙れって言うようなもの。

「それが仕事だ」

「けけけ警察にっ、通報してやるからな！」

ため息が出るほど頭が悪いが、それはちょっと厄介だ。

「足りない頭でよく考えたな」

坂東が警察に逮捕されたら公闘官の俺たちは手を下すことが出来なくなる、警察の公務を妨害する権限は俺たちにはない。

逆に警察官は公闘官相手にその刀を納めろとは言えない、それこそ公務執行妨害だ。
警察に捕まった者は司法の下で裁きを受け、公闘に捕まった者は罪の大小に関わらず処刑される。
警察と公闘は同じ治安維持活動を行う組織だが全く別物である。
犯罪者が警察に助けを求めるなんて可笑しな話だ、死より怖いものは無いってか。

「連絡するならどうぞご勝手に。　警察よりも病院のスイートルームを予約する方が賢明だぞ、死ぬまでお世話になりますってな。それとも寺か、イカした戒名でも考えてもらうんだな」

「紅藤は優しいな、ははっ。　おい、坂東」

「……」

「呼んでるだろうが、返事しろよ」

「ななな何だ！！」

「お前に残された手段はもう死しかないぜ、愛しい者に連絡しようと携帯に手を触れた瞬間にこの世からおさらばだ。　一般の法では未成年に極刑を与えることは出来ない、が、介入法は相手が未成年でも現行犯なら粛正出来るんだよ。　未成年だからって罪から逃れようとか絶対に許さねえ」

人を殺しておいて無期懲役だと、笑わせる。未成年だからって更生の余地ありで無罪放免、バカバカしい。

「げげげ現行犯って、俺は何もしてねぇだろっ！！」

「そのバットはなんだ？　まさか野球してましたなんて言い訳が通るとは思ってないよな？」

「……」

「お前は今現在武装してんだよ、立派な現行犯だ。　芽は小さいうちに踏み潰す」

坂東もいよいよ追い詰められたな。

「来るな……、来るなぁぁぁぁ！！　うわぁぁぁぁ！！」

バットを振り回してエイコーを威嚇している坂東。

「今さら風穴が開くことをビビるなんて笑えるぜ」

エイコーは両手で刀を顔の横で持ち地面と水平に構える。

「瞬突っっ！！」

土煙を上げて初速のみで坂東へ詰め寄ると西洋刀を急所へ突き刺し。それを素早く引き抜くと血が噴き出す前にもと居た位置へと戻る。返り血を浴びるなんてダサいことはしなかった。

「っ……」

怯えた顔のまま絶命した坂東は足から力が抜けていき崩れるように倒れた。

「いつ見ても瞬突は速いな、俺でも防げないかもな」

「ありがとよ、紅藤。　でもそう謙遜するな、お前は強い」

状況終了、後は他の役職の人々に任せよう。

端末にある戦果報告というボタンを押すと詳細が各部署に一括送信される。情報部による死体の身元確認や仕事が完璧に遂行されたか調査された後に口座に仕事料が振り込まれる。平和を守って金がもらえるなんて人間冥利に尽きるな。

意外に仕事が早く終わった、小者集団を早く狩れたからと悦に入ってしまうのは俺もまだまだ小者だからだろう。

見たいテレビが始まるまではまだ随分と時間があるな、どうしよう。

「新宿行かね？」

同じく暇を持て余しているようだったエイコーがそんなことを言い出したのだった。

◇暴力組織対暴力公務員～第1話～

新宿に行きたいとほざきやがったかコイツ、学が無いにも限度がある。

「東城君？　それはホンキで言ってるのかい？」

無駄にハキハキとした口調、良く通る声が聞こえた。

「おう、津和野。　ご苦労さん」

こいつは津和野（ツワノ）　月子（ツキコ）、情報部に所属していて主に戦後の情報処理を担当している。月というより太陽のような奴だ。

「あたしの情報によると東城君は戦闘は得意みたいだけど……知識が無いみたいなの！」

流石は情報部、良く調査してるじゃないか。エイコーの頭には味噌じゃなくて筋肉が入ってるんだよ、むしろ空っぽかもしれん。

「ツッ子、それは溜めて言うことか。　それよりも紅藤だ。　手前ぇ失礼なこと考えただろ？」

「おう、なんでわかった？」

「隠すつもりないのか。　上等だよ」

エイコーと目配せしてお互い刀に手を掛けた。

「ちょっとちょっとちょっとぉぉぉ！！　喧嘩しちゃダメだよぉぉぉ！！」

手をブンブン振り回してあたふたしている津和野、からかい甲斐があるぜ。

「津和野、冗談だ」

「へ？」

「てか新宿に行っちゃいけねえってのか？」

「はぁ……。　旧西新宿1丁目から2丁目に及ぶ地域は企業同士が結託して資金を出し合い東京都から土地を買い上げて支配してるの。常識だよ？」

新宿副都心のシンボル的存在である都庁舎も現在は大手企業が初期建築費用の数倍の資金を東京都に支払い本社ビルとして所有している。

都庁舎は特別養成区に移転された。

数年で丸の内・西新宿・特別養成区と本庁舎をコロコロ移転するなんてよっぽどの事情があったのかよっぽど金欠だったのか。

「その地域の周囲には武装した企業戦士が配備されていて関係者以外の立ち入りを制限しているの。　地域の周囲は治安が良いとは言えない繁華街や外国人街があって、たかだか高校生の二等公闘官がチームも組まずに近寄ることはとても危険よ。　下手したら企業戦士とヤクザとマフィアを一度に相手することにも……」

体育の授業でチャカをぶっ放すご時世だ、大久保や歌舞伎町の過

激な奴らならちょっとしたことでマシンガンの撃ち合いになることもあるだろう。
悔しいがそんなのを収める力量は俺たちにはなく、所詮は社会不適合者やその予備軍を始末するただの弱い者虐めだ。強い者に挑めないのが悔しい。

「ま、そういうことだから新宿副都心観察は諦めな。　時間もあるしゲーセンでも寄ってこうぜ」

「えっ！？　ゲーセン行くのぉ？　あたしも行くっ」

仕事サボってゲーセンとか情報部所属の公闘官とは思えない発言だな。

「津和野は仕事が残ってるだろう」

「くぅぅぅ！！　後から行くから待っててよ！」

「新宿がねぇ……、そんな魔都だったなんてな。　闘校制服を着た奴が狙われるってことか」

「奴らからしたら俺たちは忌むべき存在だ、狙ってくるのも当然。
悪いことしてるのは手前らだってのに逆恨みなんて嬉し過ぎるぜ」

「ああ、嬉し過ぎて礼に参りたいくらいだ」

「……2人とも許可なく企業地域に近付かないようにね？」

「わかりましたよ、ツッ子様」

津和野の邪魔にならないように現場を後にした。
ゲーセンなら渋谷がいいか、電車賃がもったいないし渋谷ならここらか歩いてすぐだ。

「歩いて渋谷まで行くぞ」

「おう」

日が西に落ちる時間、アフター5を満喫しようと渋谷は人の海だ。
特別警戒月間らしく夥しい数の国家権力が街を警邏している。
髪を染めていようが顔中にピアスがついていようが奇抜なメイクをしていようがルールを守って楽しむなら文句は無い。俺たちは品行方正を強要しているわけじゃない。

「すごい人だな」

「ああ」

ハチ公前広場からスクランブル交差点を眺める。
人混みのせいで少し酔ってしまったようだ、仕事明けでちょっと疲れたかな。

「紅藤」

「あん？」

「あいつ、おかしくねえか？」

エイコーが指差した先にいたのは、壁にもたれかかり行き交う人々を舐めるように見ていた男だった。

「スリだな、あいつ」
目でわかる、獲物を狙う猛禽類のような目だ。
限りなく存在を消しているが、俺たちからすれば自分は良からぬ事をしようとしてますよと言っているようなものだ。
「職質かけてみるか」
「オーケイ、紅藤」
エイコーが男の所へ歩み寄る。
「よお、獲物探しか？」
「……」
「あん？　無視するな。　身分証明書と鞄の中身を見せろ」
「ふん、まだまだな二流公務員が」
「何だと？　死にたいか」
「私の気配を察知するとは只のバカではないみたいだ。　さっきから眼前を行き来する警察官は私のことを気にもかけない」
「何が言いたいんだ、おっさんよお？」
公闘官相手に物怖じしない態度、一般人じゃねえな。

「私は公闘庁４課課長・有栖川（アリスガワ）　内匠（タクミ）公闘視正。　貴様ら良いところに来たな、私の仕事を手伝え」

あの公闘手帳、天秤を閉じ込めるように交差した剣が特徴的な金の代紋、平等に悪を討つという意味を持つ公闘官の紋章だ。

ちなみに４課は対組織暴力専門の部署だ。

「失礼いたしました！　エイコー、偉い人にメンチ切んな！　刀を触るな！」

「紅藤よお、疑って疑って疑ってさらに疑うくらいじゃないと」

「まずは自分の馬鹿さ加減を疑えや」

「はっはっは、血気盛んな若者達だ、実に興味深い。　名は？」

このおっさん、ただのキャリアなんかじゃない、エイコーと問答しているところに斬り込んでやろうと思ったが隙がなかった。下手したら俺が蛋白質の塊にされてた。

「はっ。　公闘官高校攻撃部２年・紅藤夕二等公闘官です」

「同じく、公闘官高校攻撃部所属・東城英孝二等公闘官。　それで、貴方の仕事とは？」

エイコーも血気盛んな只のバカではない、有栖川の尋常ではない空気に感化され既に上司を見る眼差しに変化している。

「うむ。　幸瑛會は知っているな？」

「はい。　先ほど幸瑛會下部組織の使い走りのギャングを血祭りにあげてきたところです」

「そうか。　その幸瑛會が渋谷駅周辺全てをシマにしようと暗躍しているのだ。　鉄道会社を始め遊技店・小売店・飲食店・娯楽店・風俗店諸々を傘下にし、渋谷駅周辺に一大勢力を築こうとしている。公闘庁４課の仕事はそれを華麗に阻止することだ」

指定暴力団・幸瑛會の組員数は全国に５万人以上、それが躍起になったら渋谷駅周辺くらい簡単に支配されてしまうだろうな。

「暴力団員排除作戦を華麗に遂行するために、貴官らには奴らの息のかかっていると思われる店舗・ビルに強襲をかけてもらいたい」

放課後の特別授業がヤクザ狩りなんて面白い、ゲーセンでゾンビ相手に銃をぶっ放すより遥かに面白い。

俺はエイコーと目を合わせるとニヤリとほくそ笑んだ。

◇暴力組織対暴力公務員～第２話～

渋谷駅周辺を傘下にしようなんて幸瑛會はヤクザランドでも作りたいのか、そんな楽しくなさそうな夢の国に誰が行く。パンチパーマのマスコットキャラクターなんて認めない、見つ次第後ろから池に蹴り飛ばしてやる。

「警察も暴力団排除の為に巡回している。　しかし所詮は警察、牽制する事はできても事件を阻止する力は無い。　警察が動くのは至って事後だからな」

警察が制服姿で巡回するのには犯罪抑制の効果がある。私服警官が警邏しても何の意味もないからな。

「俺たちに任せて下さい。　公闘視正の仕事に付き合えるなんていい勉強になります」

「ふっ、華麗に舞ってこい。　掴んだ情報は端末で送れ」

「了解いたしました」

有栖川公闘視正は再び壁にもたれかかると気配を消した。
自分の目を疑う、さっきまで楽しくトークしてたおっさんが消えたように見えなくなったのだから。
さて、狩りの始まりだ。
先ずは端末を使って渋谷駅周辺をシマにしている組織の検索をする。
ヒットしたのは幸瑛會直系二代目白柳組という組織、組長は幸瑛會直参・白柳（シロヤナギ）　天玄（テンゲン）、都内の有名私立大学卒業後弱冠２３歳にして

前組長だった親の跡を継ぎ組長に就任、インテリヤクザってやつか。
表向きは店舗経営などの合法的な商売をしているように装っているが、裏では麻薬取引や高利貸しをして利益を上げているとのこと。
ヤクザと犯罪なんてさくらんぼみたいなものだから調べるまでもなかったか、大なり小なり悪に手も足も染めていることくらい簡単に予想できた。
検索できたのはこれくらいだった、兵隊の人数も根城の場所もアンノウン、４課が仕入れた情報をリークしてくれれば助かるのにそうしてくれないのには意味が有るからだろう。

「パチンコ屋とか風俗店とかクズが溜まりそうな所から探していくぞ。　そこに出入りする白柳組構成員にちょっと話を聞けば巣食う場所くらいわかるだろ」

「澱んだ場所にクズは溜まるってか、オーケイ紅藤、別れて探そう。
そっちのが早く見つかる」

「いい考えだな。　手掛かりを得たら端末で連絡しよう」

「あいよ」

ハチ公広場でエイコーと別れた。
道玄坂の方角を向きスクランブル交差点を眺める、これだけの人の中から白柳組構成員を見つけ出すのは骨折りだ、軽く死に至る病に冒されそうだぜ。

「さてと……」

「動くな！」

「あ？」

いきなり後頭部に固くて冷たいモノをつきつけられた、つめた～いジュースではないな。

とりあえずホールドアップ、逆らう気は無いことをアピールしておこう。

「いきなり何だ、人の頭に不快なモノを当てやがって。　殺すぞ」

逆らう気満々だな俺、ホールドアップの意味がまるで無い。

「公闘官が背後を取られるなんてな」

あえて公闘官に喧嘩売ってきたのかこいつ、救えないバカだ。

「死ななきゃわからんか」

素早くしゃがみ刀の柄を持つと反転し背後のバカを斬りつけた。

「ちっ！」

肉を斬った感触が伝わってこない、避けられたか。

「はっ！」

「待て待て待て！」

振り返り相手の喉元に切っ先を向ける。

「殺し合いに待ったはナシだ、喉から声を出すテクを教えてやろう

か？」

「だから待てってユウ！」

「……てめぇ」

窮地に陥りながらも銃口はしっかりと俺の額を捉えているが、俺を本気でくノ一にするつもりはこいつにはないだろう。　この街中でいきなり同級生の俺を襲ったのは乃木（ノギ）　祭（マツリ）、闘校攻撃部所属のクラスメイトだ。

色気ゼロ、可愛いらしさゼロ、淑やかさなんてもはやマイナス、街中で同級生の後頭部にチャカをつきつける奴が淑女なわけがない、ジャントルマンもぶちキレる。

ハーフツインテールで小柄な容姿は相手を油断させるのには最適かもな。しかし中身はそれに反してなかなかのサディスト、腕前もなかなかだ。

「ちょっとしたジョークじゃないかユウ。　電気ケトルじゃあるまいしそんなに直ぐに沸くなよー」

「安心しろ、お前の姿を見てえらく冷めた。　じゃあな、祭くん」

俺に喧嘩を売ってくる奴はどんな奴かと期待したがこんなちんちくりんとは興も醒める。

「ヘイヘイヘイ、ミスターユウ。　それは無いんじゃないの？　楽しいこと、ねぇ、今から楽しいことするんだろ、私にはわかるぜ？」

抱きつくなうっとうしい、色も無いのに色仕掛けか。

おまけに行き交う人々は奇異な光景を横目でチラチラ見てくるし

よ。

「その手には乗らん。　コーラでも飲んで膨らませるところを膨らませてから出直すんだな、俺は忙しいんだよ」

「ふーん、そっか。　ならいいや」

「わかってくれたか」

「後ろからこっそりついて行くぜ！」

「その時点でこっそりじゃねえじゃねえか！　ホントなんなんだよ、せっかく公闘庁直轄の……」

「公闘庁直轄？」

しまった、口が滑った。

「いや、気にしないでくれ」

「気になる気になる気になる！」

「あーもう、うるせえな、わかったよ！　公闘庁のお偉いさんから仕事をもらった。　今から白柳組をシメる、暇なら手伝え」

「わーい！　そんな楽しそうな事を一人で楽しもうなんてユウもとんだムッツリだ」

確かにヤクザを狩ることは俺にとって一種の快楽だが、これはムッツリなのだろうか。

放課後にジャリガールの御守りなんて面倒だが、駄々を捏ねられてここで立ち往生するよりはマシだろう。

「それより周りを見てみろ」

「え？」

全身白で統一された服装のいかついオジサマ達がポン刀を俺たちに向けて取り囲んでいた。胸元には柳の木を象った金バッチがくっついている。

捜す手間が省けた、ハチ公前広場で騒いだ甲斐があった。

「白い装束とは死ぬ準備は出来てるみたいだな、それとも謎の電波でも防いでるのか？」

「……。　崇高な白い柳の下に集った我等がガキの相手とは……」

「喋る暇があったら極楽浄土に往生できるよう自分の罪でも懺悔しろ。　……もっとも死をもって續罪とするがな。　公務執行妨害・威力脅迫などなど介入法に基づき貴様らを浄化する」

「ついでに晩御飯に鉛弾はいかがすか？」

祭と背中を合わせてオジサマ達と対峙した。

祭は左手に愛用のデザートイーグル、右手に抜き身の小太刀、銃で攻め小太刀で守る戦法を取る祭の攻守は均整が取れていて鉄壁だ、女だからと祭を気にせず闘えるし実に攻め易い。

ハチ公も逃げ出してしまうような緊迫した空気がハチ公前広場を覆った。

◇暴力組織対暴力公務員～第3話～

巻き添えを食いたくない一般人達はそそくさと立ち去って行く。
それは実に賢い判断だ、流れ弾に当たろうが人質に取られようが俺には関係ない、人質の救出など今回の仕事には含まれていない、とろとろしてる奴が悪い。
火事と喧嘩は江戸の華とは言うが、その火花で自分の身を焦がしては元も子もないからな、野次馬は傍観者ではない、止めておいた方が身の為だ。

「広場の皆さん、避難してください！」

駅前交番の警察官達が人払いをしている。
人命を尊重する警察官らしい行動だ。
ハチ公前広場をはじめスクランブル交差点や改札口は封鎖され一般人が消えた。
どこから湧いたかわからない白服のおっさん達、たぶん俺と祭の会話を聞いた白柳組の奴が連絡して集めたのだろう。
警察が人払いをしてくれたお陰で構成員の人数が数え易くなった、そこは感謝する。
白服の人数は全部で8人、俺と祭を等間隔に取り囲んでいる。
装備はニューナンブ、ひと昔前の警察官の装備だ。推進法制定前から国内で製造されていた銃だけに使い勝手が悪い。
今では国内大手の電機メーカーや自動車メーカーがその技術を活かし優れた武器を製造し、古来から銃器を製造している国外メーカーも日本の武器市場に参入している中でそれはお粗末にも程がある。
しかしその分安価で手に入れ易く一般家庭にも広く普及している。
全員が時代遅れのニューナンブを好き好んで装備とは、こいつら古いモノ好きか、熟女なんてドンピシャなのではないだろうか。

今は納めているが日本刀も持っていたな、使う気が無いのだろうか。
拳銃が日本刀より勝るとは限らないぞ。
「祭、お前何人倒せる？」
背中越しに祭に囁きかける。
「全員」
言うじゃねえか、それくらい俺だって可能だがそういう話ではない。
「短時間で確実に仕留められる人数だ」
「半分かな」
「よし、そっちは任せた」
白服は俺たちを包囲したし数でも勝るので勝利を確信しているのか余裕の表情だ。
その気持ちはわかる、今の状態ならば俺と祭をハニカム構造に出来るかもしれないからな。
でも俺は自分が劣勢だとは欠片も思わない、こいつら公闘官と闘ったことが無いのだろう、舐めすぎだ。
「一応確認しておくけど、あんた達は白柳組の構成員？」
冷静に一番偉そうなおっさんに聞く。

「だったらどうなんだ？」

「白柳天玄とお話しがしたいんだが、どこにいるか聞きたい」

「……」

シカトかよ、まあいい、無理矢理聞き出してやる。

「ガキ共、自分の立場をわきまえろ。　優位に立っているのは我等だ」

「正常位でも騎乗位でも何でもいい、乱交といこうぜ。　祭！」

「うん！」

背中を合わせたまま１８０度回転する。

「なんだと！？」

標的としていた前後が瞬時に入れ替わったのだ、驚くのは当然、そしてそこに隙が生まれる。

祭はこっちに銃を構えていた正面の白服に鉛弾をぶちこんだ。

「かぁっ」

祭の放った弾丸は白服の頭部を捉えた。

祭はすかさず突進して隣で呆気に取られていた白服に発砲し、隣に居た白服の背後に周り込み羽交い締めにした。

そして首筋に小太刀をヒタヒタと当てがいながらデザートイーグルを他の白服に向けて威嚇する。

「ちっ、撃てっ、女だ！」

一斉に白服達は包囲を突破した祭に銃口を向ける。

「こっちだ」

祭が小刻みに動き回ってくれたお陰で奴らの視線は俺から逸れていた。

声をあげて目標を絞れなくさせ敵の意識を撹乱させる。

「ちっ、死ねやぁ！」

俺の正面にいた白服のニューナンブが火を吹く。

「ふっ」

それを上体のみ動かし避ける。

白服の銃口は俺の額を捉えていた、迫り来る敵を一撃で瞬時に仕留めたい時は急所を狙う。

だがそれは間違いだ、頭部は的が小さい、こういう場合は胴体を狙うのが定石、焦りが見え見えなんだよ。

しかも得物はリボルバーだ、速射性は無いに等しい。

次の射撃が行われるまでの刹那の時間に正面に居た白服に飛び込み抜刀の際の威力を殺すことなく鋒打ちで手首を砕く。

「かはぁ」

白服は手首を押さえうずくまる。

「……」

無感情で背中を貫いた。

肉を貫通する手応えが伝わってくる、実に生々しい。

「かっ……はぁ……」

まだ息はある、生かしておいてやったんだ、コイツにはまだ働いてもらわないとな。

「おらぁ、立てっ」

片手で襟首を掴み肉に埋まったままの愛刀の柄を空いた手で握りテコの原理を利用して強引に立たせる。

「かはぁぁぁ」

「外道がっ！」

またしても響く銃声。

それを肉の盾で防ぐ。

「……」

「苦しむ仲間を楽にしてやるなんて優しいな」

「なっ！？」

フレンドリーファイアを利用した崇高な防御だ、外道とは失礼だ。

「はぁ！」

「つっ！！」

仲間をあの世に送った白服が冷静さを取り戻す前に刀を引き抜くと柄の元を持ち苦無のように投げつける。

「かはぁっ……」

喉仏の辺りにトンネルを開通させた。

「祭！！」

「ああ！！」

祭も先ほど捕らえた白服を盾にデザートイーグルの引き金を引きまくる。

「ぐぅ……」

「かはっ……」

「くはぁ……」

「現代人は鉄分が不足してるからな！　補給してやるよ！」

その前に出血多量で死ぬがな。

白い服を真っ赤に染めた男達はばたばたと倒れる。

鉄分を補ったために死ぬなんてな、健康志向も考え物か。

「あとは……」
「むぐぅっ……」
「忘れてた。　ありがとな」
「か……は……」
祭は盾にしていた白服の喉笛を小太刀で切開した。
血しぶきが心臓の鼓動とリンクしてぶしゅぶしゅと溢れ地面を赤く塗った。
「残るはあんた1人だ。　ふふ、白柳天玄の居場所、吐いてもらうぞ」
俺はポケットに手を突っ込みながら冷笑して言った。
「うーん！　ほら、ちゃきちゃき喋る！」
祭は勝利の優越感に浸るように伸びをしながら言う。
「ぐぅ……。　親父は……、天玄さんは……がはぁっ！」
「なにっ！？」
今まさに白柳天玄の居所を俺に告げようとしていた白服の頭が弾けた。
狙撃か、どこからだ、誰が殺った。
俺と祭は再び身構える。

「どういうことだ……」

俺たちの目の前には信じられないような光景が広がっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8910s/

オレンジ色の戦人

2011年6月6日23時08分発行